

### 第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（2）

#### 好善社の活動

ハンセン病問題に対する政策が、国によって何もなされていない頃、キリスト教の宣教師たちは、魂をキリストの福音によって救済することを目的に、ハンセン病を患った人たちに深く関わっていた。その中に、好善社の取り組みがある。好善社の設立は 1877 年アメリカからの宣教師ヤングマンによってである。彼女の課題は「キリストの精神をいかに社会的に実践するか」にあった。その主旨のもとに呼び集められた女子学生 10 人によって組織されたのが好善社である（『ある群像—好善社 100 年の歩み—』）。その後、ハンセン病を発病したキリスト者（プロテスタント）女性との出会いが「慰廢園」発足（1894 年）につながっていく。資金の調達にはイギリスの救癩協会（The Mission to Lepers in India）からであった。

この慰廢園の特徴は「慰廢園規則」の第 2 条に表れている。そこには第 2 条 目的として次のように記されている。「本園は病院と異なり慈愛に富み給ふ全能なる神の聖旨を奉戴して憫然なる癩病患者を尉籍救養し、且つ広く癩病患者に対し福音を宣伝するを以て目的とす」。

つまり慰廢園は、福音を宣伝することが目的であるとはっきり示されているのである。ヤングマンと好善社の本来の狙いは、「この国の捨てられたらい患者たちに、聖書が説く意味での真の慰めと霊的な生命の光明を与えること」で、ヤングマンが好善社に期待したことは、この信仰の働きであった（前掲『ある群像—好善社 100 年の歩み—』）。その後、病院へと移り変わっていくことになる。さらに 1907 年の「癩予防ニ関スル件」の頃、慰廢園には行政の手伝いの面も出てくる。1904 年に東京市養育院より、10 名の患者を委託されたり、1909 年には多磨全生病院の一時救護所的役割を担っていた。それと平行して全生病院には訪問伝道が、1910 年許可された。

その後、戦後は好善社の本来の目的に従って、各療養所に教会堂の建設を行っていった。各療養所のプロテスタント諸教会の教会堂はほとんど好善社との関わりで建設されていったものである。1960 年代からは療養所に出かけてワークキャンプを実施。このワークキャンプは人間関係の回復を目指したもので、ここでは「過去の『訪問者から療養者へ』、『与えるものと受けるもの』という一方的なものを打ち破ったことは間違いなく、この事実は好善社の新しい活動展開の素地となった」と『ある群像—好善社 100 年の歩み—』の中で、自己評価をしている。

#### 5) キリスト教系私立療養所について

日本で最初に設立されたハンセン病施設が、カトリック系の神山復生病院である。1888 年パリ外国宣教会の司祭テストヴィドにより設立された。

カトリック雑誌『声』979 号（1959 年 7 月）では、私立療養所の存在意義として、カトリック系の私立療養所はただ、食べさせて、着せて世間並みの娯楽を与えるだけでなく、魂の貴さと苦しむことの社会的意義を主張するので、価値がある。さらに国立の施設が生まれたのは宣教師たちに教えられたからと述べられている。そしてその写真つきの特集では「祈り、かつ働く生活」とのキャプションが施され、あたかも人里離れたところで生きる修道院であるかのようである。

宗教的救済事業として始まったのであるが、神山復生病院に限らず、これまで見てきたさまざまな事業においても、その当時、そして今も何を「宗教的救い」と呼ぶのか、またその内実は問われ

検証されなくてはならない。

私立療養所における特筆すべき事柄については後述にする。

#### 4. 新宗教教団とハンセン病療養所

##### 1) 天理教とハンセン病療養所

###### 天理教とハンセン病

天理教においては、教祖中山みき（1798～1887）が晩年「病氣直し」としてハンセン病患者を癒したという伝承が数々残っており、また教祖に助けられたという人々が自ら布教に携わっていくことが明治期から多々あったとのことである。池田士郎「天理教ハンセン病布教史の一齣―成田喜久郎氏の信仰の歩み―」では当時の状況が次のように記されている。

教祖の病氣直しの評判が広がるにつれて、多くの人びとが救いを求めてやって来たが、村の中で教祖の癒しの能力は必ずしも歓迎されなかった。それは、教祖の病氣直しの不思議な力にすぎる思いでやって来る病人のなかには、性の病を患う者や「癩病」と呼ばれたハンセン病などの病者が多くいたからである。つまり、社会的に穢れた病と意味づけられ、接触を忌避されていた一群の人々が村の日常生活の空間に入ってくることへの嫌悪感が教祖を疎ましい存在であると感させた。

1925年最初の天理教の所内団体「天理教寄進会」が大島青松園で結成されたが、すでにそれ以前より、1914年に入園した最初の天理教信者が後に入園して来た信者たちと共に活動を開始している。青松園では当時薬局の職員であった天理教信者の泉川清春が、1924年11月に高松部属八栗宣教所長木村留吉を園に案内しておりそこから木村の月一度の園への訪問がスタートしている。天理教の療養所への関わりの最初である。

また多磨全生園については、団体としては結成されていないが昭和の初めごろ毎年暮れの二十日過ぎになると東京教務支庁のことであろうと思われる天理教の団体から、「慰問袋」が届けられており、この「慰問袋」は3、4年続いていたように思うと1976年当時宗教連合会の会長をつとめていた入所者が語っている。

園当局との関わりにおける特筆すべきものとして、愛生園に「真柱」の寄附による患者収容舎が建てられたという事例がある。1976年に編集された、『ハンセン氏病布教史録』（天理教療養所布教協議会編）には、次のように記載されている。

当初は施設が不十分で入園患者を十分に収容することが出来ないので、光田園長の希望により二代真柱様が寄附下さって、患者収容舎である天理寮が出来たのであります。時に昭和九年四月十日であります。その後年数も経、また国の施設の模様替え等により最初の天理寮は改築されましたが、昭和十一年十二月二十日第二、同十四年九月二十日第三天理寮が完成して、現在も天理寮の名は残されているのであります。

### 第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（2）

光田健輔と天理教教団、また二代真柱中山正善との交わりについては明らかでないが、光田の言う施設の不十分さはまさに1931年の「癩予防法」制定後強制隔離実施のさなかにおけるものであり、間接的・無意識的にであれ天理教教団が強制隔離政策に加担したことは否めない。

現在、国立療養所13園のうち10園に入所者による天理教の会が存在し、その他に多磨全生園では自治会が位置づける宗教の会としては存在しないが、6名の天理教信者が園内で活動している。

天理教の特徴として、布教師の働きかけにより園内において信者が誕生しそこから団体が結成されたというのではなく、多くの場合入所以前から信者であった入所者が中心となって、教団側に布教師の派遣を要請すると同時に会を結成し、また神殿を建築するという形をとっている。

療養所における天理教の会はそのほとんどが入所者により自発的に結成されたもので、天理教を信仰する入所者同士が療養所間で連絡を取り合う中から会が生まれた例もある。天理教は、開園当初からの「公認宗教団体」より時期を後にしており、人数を揃え公認団体となるまでには時間を要した所もある。現在に至ってこそ天理教の様式で入所者の葬儀が行われているが、入所時には葬儀のために「園公認」とされた他の宗教を選ばざるを得なかった、という入所者の証言もある。

また天理教においては「教化する外部からの布教師と教化される入所者」という構図ではなく、入所者自身による布教が活発になされている。

療養所における信者の中には、苦しむ人をたすける存在と位置づけられる「よふぼく（＝用木）」という肩書きを持つ人も多く存在する。「よふぼく」になるには、天理教本部にて別席といい聞き落としや取り違えのないよう同じ教理を9回聞いて、真柱から「おさづけの理」を受けなければならぬという。殊に療養所入所者にとって容易とは言いがたい決まりがあるにも関わらずである。

また教会長資格検定講習会で布教師の資格を取得し、布教所として位置づけられている園内の教会で布教所所長を務める入所者もある。

#### 「別所母屋」の開設

天理教の活動が活発化していく中で、奈良県天理市の天理教教会本部に参拝する人が増えてきた。しかし当初はハンセン病に対する偏見・差別の中にあつて、人目を忍んでの参拝であった。

1963年4月18日の教祖誕生祭に向けて、長島愛生園と邑久光明園から初めて貸し切りバスを利用した団体参拝が実施された。これは、総勢30名が参加者し好評を得た。しかし、翌年4月に実施された2回目のバス団参の際、観光バスの運転手が乗客はハンセン病療養所の入所者だと知って、天理に到着して入所者を降ろすなり勤務を放棄し帰ってしまうということが起きた。急遽天理の信者詰所に宿泊することとなったが、それを嫌がる他の信者もいた。

その場においては詰所側と他の信者に説明をすることで一応の合意を得ることができたが、こうした一連の出来事を知った二代真柱の提案により、1966年天理市別所町に療養所入所者・社会復帰者のための「別所母屋」が開設された。この件に関して、厚生省の療養所課長は「宿泊施設があつて行事をしてもらえるのであれば、これは最高のこと」と述べている。「別所母屋」に対する、現在の視点からの評価は措くとしても、当時の各宗教教団の状況から考えて、天理教は入所者の本部参

### 第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(2)

拝を積極的に受け入れるという取り組みを他教団に先駆けて行ったと言える。

この年には「教祖 80 年祭」が催されており、各療養所の入所者が別所母屋を次々と利用し、また別所母屋が各療養所からの入所者同士の交流の場所ともなった。別所母屋の運営や利用者の受け入れは、教会本部福祉課と天理大学成人会（宗教学科の学科会）の学生が当初からこれにあたり、現在に引き継がれている。

#### 天理教療養所布教協議会

1965 年 5 月 25 日、天理教本部福祉課の下に「天理教療養所布教協議会」が結成された。全国のハンセン病療養所布教に携わる各教区の者が中心となり、入所者を対象として教えに沿った「たすけの道」を推進する目的で結成され、本部と教区との密接な連携のもと現在に至っている。

天理教療養所布教協議会の主催で 2 年に一度別所母屋にて開催される「おやさと研修会」には、療養所に外から訪問していた担当者のみでなく自らも布教に携わる入所者も参加している。研修会の中では、入所者同士が交流懇談する場も持たれているとのことである。

以上、天理教におけるハンセン病問題との関わりを概観した。

#### 2) 創価学会とハンセン病療養所

創価学会が、各療養所に組織された時期、あるいは公認団体として認められた時期は、およそ 1959 年～61 年に集中している。戦後に創価学会が会員数を増加して拡大していった時期と重なる。数えあげてみれば、1959 年には長島愛生園（会員 6 名）、邑久光明園（会員約 20 名）で結成、60 年には多磨全生園（会員 41 名）・駿河療養所・星塚敬愛園（会員 50 名）、61 年には大島青松園（会員 16 名）・菊池恵楓園（会員 12 名）・沖縄愛楽園などで相次いで結成されている。全国 13 の国立療養所のうち、東北新生園を除く 12 の園で創価学会の組織は結成されている。

入所者の入信のきっかけは様々である。駿河療養所では、施設出入り業者の折伏による職員の入信を皮切りに、入所者の間にも信者が広まった。沖縄愛楽園では、入園者夫婦が外部信者の折伏により新しく信者となり活動が始まった。多磨全生園では創価学会の信者が患者として入園し、やがて折伏により信者が増えていった例もある。どの園でも、外部信者からの折伏やもともと信者であったものが患者として入園し折伏を行なって組織を広げていったと言える。

しかし、療養所での折伏は、すでに入所者の多くがどこかの宗教団体に所属しているということもあり、苦情やトラブルも相当数あった。駿河療養所では 60 年 10 月、折伏の行き過ぎによる苦情を受けて、「迷惑をかける勧誘布教は慎む」「読経は迷惑にならない音声で」などの 4 項目の約束を自治会と交わした。（『入所者三十年の歩み』駿河療養所）

活動は、月数回の集会の開催、外部からの指導者も月 1 回程度来園している場合が多い。また組織としては、園の信者組織がそのまま、創価学会の各支部に所属している場合もあり、沖縄愛楽園では 1966 年に屋我地地区が誕生したあと 77 年には支部に昇格している。（『命ひたすら 療養 50 年史』沖縄愛楽園入園者自治会編）

つぎに、多磨全生園と長島愛生園において実施した、創価学会組織の入園者らに対する聞き取り

### 第十三 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（2）

調査の要約を報告する。

多磨全生園の創価学会の創始者の一人（女性）は、1957年に全生園入園。入園の3年前にすでに創価学会に入信していた。入園後は活動をやめていたが、同じく創価学会の信者が入園してきたことにより、宗教活動を再開。活動の中心は折伏だった。その頃園内では、人の情けに飢えていたという。一ヶ月に7～8人の人が入会した。不自由者も折伏したが、信仰よりも話し相手になることの方が喜ばれたという。やがて園外の各支部の人々も折伏のため来園するようになった。しかし、ドカドカと上りこむような訪問に、後味が悪かったという声があった。60年ごろからしばらく東村山支部の20人が来園した。園の創価学会員は、皆東村山支部に所属していたという。

活動内容は、折伏が中心だった。月に一度は座談会や決意発表と体験談なども行なわれた。外部から来た幹部の指導もあった。またその他の活動では、選挙活動が挙げられる。市議・都議・衆参・・・票獲得のために支部長らが頻繁にやってきた。が一堂に集まる場所がなく、1970ごろ集会所もかねてお寺建立への機運が盛り上がり、やがて1975年に現在の蓮華堂が完成。日蓮正宗の僧侶・松藤欣道氏が朝晩に蓮華堂に通う。

1977年の池田大作の教義をめぐるいざこざが勃発。1979年日蓮正宗から創価学会を切りはなした。1979年当時の会員は88名、お寺に付いた者30名、学会は58名だった。

外からきた人は支部長・婦人部長・支部ブロック長・総ブロック長など4～5人だった。いつも同じ人だった。現在は日蓮正宗の地域の妙華講（85名ほどの会員）により毎週一回の清掃と勤行。御殿場の東陽山持妙寺の住職が訪問をしている。

他の療養所の現状は、大島青松園は会館を持って活動をしている。星塚敬愛園は患者が会館を建設した。しかし、それぞれの横のつながりは、今はない。

次の方は、全生園における現在の創価学会の中心人物で、1950年23歳で星塚敬愛園入園、1965年に多磨全生園に転園。

妹が先に創価学会に入信しており、妹のすすめや園の人々からも誘われて入信した。活動は折伏第一だった。1962年ごろは「入らなければろくな死に方をしない」といわれた人もいた。外から来る人は、この病気を嫌っている人もいた。後遺症がひどかったからだろう。子供も連れてこなかった。個人の家には来なかった。

園の人は宗教を持っているので、1968年以降は動きがなくなった。新入生は現在ほとんどいない。その頃の活動は、月一回の座談会などで、基本的に今も変わらない。

現在の活動は、創価学会清瀬平和会館に月に二度ほど通う。

そして、長島愛生園の現在の創価学会の中心人物（男性）の方は、1929年生まれの75歳。広島県出身で1958年に発病して入園した。